

した。これらのことから、飼育水1トン当たり鶏糞100gを施肥する場合には、施肥後1週間ないし10日後に種苗の池入れを行なえば良いと思われる。また、トン当たり200gの施肥を行なう場合は池入れまで15日以上おく必要があると思われる。

## 2. 種苗育成試験

### 〔試験1〕

#### 1) 方法

2㎡コンクリート水槽（水深50cm）8面を使用し、次の4区を各区2面ずつ設けた。

殺菌区：種苗の池入れ前日に海水を張り、カルキ10ppmで殺菌した。

海水区：種苗の池入れ1週間前に海水を張り、放置した。

鶏糞区：池入れ1週間前に海水を張り、施肥（100g/t）を行なった。

鶏糞+ランソウ区：池入れ1週間前に海水を張り、ランソウの種を入れ、施肥（100g/t）を行なった。

各池にはP<sub>7</sub>~P<sub>8</sub>（平均0.003g）のウシエビ各100尾を放養した。供試エビは台湾から輸入したものである。水槽には砂を敷き、塩分濃度を20~25‰に調整した。餌は台湾製ウシエビ用配合飼料を使用し、投餌率を20~10%として、全区に同量ずつ投与した。試験期間は昭和61年6月10日から7月8日までの29日間であった。試験期間中は各池とも換水せず、強めの通気をした。

#### 2) 結果

飼育結果を表1と図2に示した。それぞれの区で歩留りに差はみられず50~71%と低い歩

表1 種苗育成試験1結果

	無 施 肥 区				施 肥 区			
	殺 菌 区		海 水 区		鶏 糞 区		鶏 糞 + ラ ン ソ ウ 区	
放 養 月 日	昭和61年 6 月 10 日							
尾 数 (尾) N <sub>0</sub>	1 0 0							
総 重 量 (g) W <sub>0</sub>	0.3							
平均体重 (g) X <sub>0</sub>	0.003 (P <sub>7</sub> ~P <sub>8</sub> )							
終 了 月 日	昭和61年 7 月 8 日 (飼育日数29日)							
尾 数 (尾) N <sub>1</sub>	50	58	66	56	55	62	51	71
歩 留 り (%)	50	58	66	56	55	62	51	71
総 重 量 (g) W <sub>1</sub>	28.9	49.3	74.7	66.1	79.8	70.7	80.0	111.8
平均体重 (g) X <sub>1</sub>	0.58±0.35	0.85±0.54	1.13±0.67	1.18±0.49	1.45±0.87	1.14±0.73	1.56±1.01	1.57±0.79
増重倍率	192.7	283.3	377.3	393.5	483.3	380.0	522.9	524.8
不 明 量 (g) W <sub>2</sub>	14.5	17.9	19.3	26.0	32.7	21.7	38.5	22.9
日 間 増 重 率 (%)	19.89	21.50	22.70	22.88	23.75	22.73	24.09	24.11
総 投 餌 量 (g) F	104.2	104.2	104.2	104.2	104.2	104.2	104.2	104.2
餌 料 効 率 (%)	41.4	64.2	89.6	88.1	107.7	88.4	113.4	129.0
水 温 (°C)	28.9±1.45	29.3±1.54	29.4±1.57	29.8±1.68	29.3±1.50	29.3±1.54	29.3±1.56	29.3±1.44
塩 分 (‰)	21.5±1.25	21.4±1.42	21.4±1.44	22.5±1.68	21.8±1.40	22.7±1.53	23.3±1.47	21.7±1.15

$$\text{増重倍率} = \frac{X_1}{X_0}, \quad \text{日間増重率} = (\sqrt[t]{\text{増重倍率}} - 1) \times 100 \quad \text{ここで } t = \text{飼育日数}$$

$$\text{歩留重量 } W_2 = \frac{X_0 + X_1}{2} \times (N_1 - N_0) \quad \text{餌料効率} = \frac{W_1 - W_0 + W_2}{F} \times 100$$